

松永澄夫著「哲学史を読む」東信堂 2008年6月1日刊を読む

人間の科学に向かって - 18世紀英仏哲学・思想を理解するために -

1. 17世紀から18世紀へ - 学問と生活 -

- (1) 17世紀西洋が学問の面でなした最も重要なことは、「自然哲学」を今日の「自然科学」へと変貌させたことである。

ちょうどガリレイ(1564 ~ 1642年)とニュートン(1642 ~ 1727年)との2つの世代のうちのことである。

革新は観察と解釈の学である天文学から始まり、実験の科学である力学において提出された運動論に惑星の運動を組み込むことによって、成し遂げられた。

そうして、結合の結果はと言えば、人間の営みの彼方で超然としていた天上の世界が地上へと手繰り寄せられ、人間が己の支配力の強まりに気づいたということである。

- (2) 空は、昼夜と季節の移り変わりとを司る太陽が支配するところであり、その光と熱とが降り注ぐ場所、そして風や雲が往き来し、雨や雪が落ちてくる場所として、すべての人々の暮らしの絶対的な条件であった。

また、月の満ち欠けは、昼夜の交替よりは長く季節の推移よりは短い時の流れを刻んで、人々にそれに応じた行動を指示するものであり、さまざまな迷信じみた慣習の源でもあった。

最後に星々は、太陽が方位を示さない夜にも、陸上、海上の旅人を導くほか、暦と占いを通して人々に何をなすべきかを指示したが、少数者にとってのみの関心の対象であった。

いずれにしても、かつて天空は宗教的な天上の世界とイメージのうえで一体化して、地にいる人間にとっては仰ぎ伏すべき存在であった。

- (3) しかるに、惑星の運動が地上における物体の力学的運動と同じ法則において理解されるや、人間を支配しつつ地上界と隔絶したものとしての天空は消えた。

力学は、内骨格をもつ体をした人間が槌子の原理で体の各部を動かし物を動かすということに出発点をもつ。

確かに、その出発点に直接につらなりながら卑近な日常生活におけるさまざまな技術と一体化していた古来の力学、これとは異なるものとして近代の力学は誕生した。

時間の微分を含む数式によって表現される運動論として説明領域を広げ、まったく新しいものとなったのである。

その新しさは、慣性の法則(動いているものは外力が働かない限り、いつまでも動く)が典型的に示すように、日常の見解(動いているものはいつかは停まると思う)の当たり前さを、いったんは宙吊りにする。

とはいえ、近代の力学も人間自身の活動の延長において理解できる事柄であり、実験という方法と表裏の関係にある技術的工夫の進展とともに発展するものであるという性格には変わりはなく、そこに秘密めいたものはない。

こうして、天上をも含めた見える限りの世界は神秘のままに敬われひれ伏すべき、という性格を失った。

天界も、自分たちの手でコントロールできるものが数多く存在する地上の人間の活動の舞台と一続きのものであり、探究可能なものなのである。

こうなると、新しい時代の知的な人々は、もはや足どり確実となった世界の探究と自然を支配せんとする試みとで忙しくなった。

- (4) かくて、続く 18 世紀は、自然に関しては博物学の世紀となり、また、医学と結びついた、新しい生物学前夜の生命論が起こり、さらに肥料や衛生、紙や火薬の製造の問題などを背景とした化学が誕生する時代ともなった。

他方、神授とされる王権についても、また、啓示宗教の導きのもと現世の人々が従うべき地上の道德・規範についても、自己の理解が及ぶ限りでその根拠ともども点検しようとする人々を輩出する時代が現われた。

すると、それまで機能していた権威や慣行等の批判も必至となったが、批判は単に知的営みに留まるものではなかった。既に宗教改革が、教会の権威に代えて個人の良心の法廷を呼びだして、それは生活の根本の変更を伴っていた。

宗教抜きではあり得なかった政治の激動に目を転じて、オランダの独立と、国王の処刑と王政復古を経験した後のイギリスでの名誉革命では、人々の事柄の正当性を言葉において示そうと努力しながら、己自身のみを^{たの}持みとした世界の見方と^{たの}つくり方を手に入れようとしてきたのである。

18 世紀に、こうした傾向は強まり、動きが加速した。

2. 人間の科学

- (1) 己を^{たの}持みとすること、それは己自身(人間)を解明することによってこそ確実に果たせるのではないのか。

当初、「人間についての新しい学」は、人間の心についての学、精神哲学として、ガリレイ、ボイル、ニュートンらが確立していった自然哲学(今日で言う自然科学)を範にし、それと並ぶ資格のものとして構想された。

新しい知的精神の最も確実な勝利は自然に関する学問であったからである。

範にすると、その学から学んだ方法を違った主題の学にも適用しようということであり、そのとき、自然科学における一連の作業、観察、比較、仮説設定、実験、検証、理論構築のうち、特に観察や実験の重要性が注目され、ここに「経験主義」と呼ばれるものが生じた。

- (2) しかしながら、自然の学におけると類似の方法を人間の学に適用しようとする経験主義の主張は、実質的には、経験とはどのような構造をもっているのか、という探究のかたちをとることになった(「経験主義」 - 本書の論稿6 - 参照。)
- つまり、経験は解明されるべき主題となったのである。
- すると経験主義の方法というものも自明なものとは言えなくなった。実際のところ、反省と分析という方法が採用される場合が多かった。
- (3) もう一つ注目すべきは、経験についての探究は、自然の学の成立自体をも経験内容として巻き込んで、解明すべき事柄としたことである。
- このことは経験主義の認識論的部分に明瞭に見てとれる。
- 経験についての学は自然の学をも(認識経験の一部として)己の一部に含むはずのものとなった。
- のみならず、人間が関わるあらゆる事柄は、一見は経験の彼方にあるかと思われる事柄すら含めて、すべて、宗教も道徳も政治も、感情生活も経済上の取り引きも、教育も、その自由意志も運命も、地理も歴史も、経験主体たる人間についての学の部分領域をなす主題となるほかなかった。
- (4) 1733年、風刺詩人ポープは哲学詩『人間論』を著し、「人間研究こそ正しき知識の目標」と謳^{うた}った。
- そして、「人間の科学」という標語、旗印は、哲学者としてばかりではなく社会学者として真価を発揮することになるヒュームが(『人性論』1739年)
- また、生理学を探求し生命論を提出し、19世紀に来たるべき新たな生物論を準備したバルテズ(『人間科学の新原理』1778年)、それから、数学者として出発し、人類の進歩を信じて社会、政治、経済、教育の分野で大活躍したものの、フランス革命で斃^{たお}れたコンドルセが(アカデミー・アランセーズ会員就任講演、1782年)、それぞれに掲げたものであり、最も望まれる、あるべき学の理念を示していた。
- そして、この理念は、コンディヤック(1714～80年)の人間悟性の学を発展させつつバルテズの生命論をも受け継いだデステュット・ド・トラシ(1754～1836年)とカバニス(1757～1808年)との観念学を経て、メーヌ・ド・ピラン(1766～1824年)にまで引き継がれるのである。
- (5) ここで留意すべきは、この「人間の科学」は、人間と人間が関わるあらゆる事象についての知識の集積を最終目標とする純然たる認識活動であるのではない、ということである。
- それは人間の幸福を目的とした実践へとつながるべき科学なのである。
- しかもその幸福は、現世での幸福、この世に生を享けた人間がみずからの力で築き、経験のうちで味わうべき事柄としての幸福なのである。
- 近代の人間の科学の理念の誕生を、ルネッサンス人文主義にまで溯らせる試みはどうか。

ペトルルカは「人間の本質を知らず、なぜに我々は生まれたのか、どこから来たり、どこへゆくのかということに何の関心ももたずに追究されるような学問は無意味である」と述べた。けれども、人間の経験の有りように目を凝らし、分析的な方法意識をもって研究する態度は未だ生まれていないと思われる。

3. 言葉の力の蓄積 経験と理性 - 権威の批判 -

- (1) ところで、経験重視の時代が、同時に啓蒙の時代として何事についても理性を信頼する時代であるとはどういうことか。

いわゆる経験主義は合理論を批判しながら生まれたのではなかった。

この疑問を解く鍵は「批判的精神」にある。

つまり、自己を尺度として一切を吟味しようとする姿勢にあるのである。

- (2) ロック(1632 ~ 1704年)からヒューム(1711 ~ 1776年)にいたる思想も、18世紀フランスで最も精緻な学説を提出したコンディヤックも、すべてデカルト的な近代の観念論の地平の中でしか動いていない。

この地平を切り拓くべく働いたのは明証性の要請である。

この要請ゆえにデカルト(1596 ~ 1650年)は、感覚に真理としての資格を与えながった。

しかし経験主義では、同じ要請が、隠れたものの対極にある感覚の顕わな直接性に重きを置くようにさせ、感覚から始まると考えられた経験の価値を称揚させたのである。

そうして、明証性の要求は、学問が問題であったデカルト、そして始まりでは認識論としての色彩が強かった経験主義を越えて、既存の諸学問のみならず諸々の権威に盲従せず、吟味すること、己自身で確認しようとするこへとつながってゆくのである。

この、自己に内在する吟味する機能が、理性と呼ばれたのである。

- (3) さて、西欧には、理性と経験との18世紀、人間の科学を企てる18世紀に向かう長い助走があって、それは言葉の力の蓄積として捉えることができ、ここにヨーロッパの特色があると、筆者は考える。

今日のグローバリズムが進展する世界での西洋の覇権というものも、この鍛えられた言葉の力の蓄積に一因があると私は思う。

あと一つの要因は、個々人を越えてしかも世襲によらず生き延び活動する。今日の企業体に典型をみるような組織の発明かと推測する。

[コメント]

近代哲学の前提となる社会、科学、技術の発達や思想の変化がよくわかる。言葉の力の蓄積の成果としての近代哲学が萌芽する。哲学入門として興味のない著作。

- 2010年4月24日 林明夫記 -